



鳥に関するウンチク

「カラス」の語源は有名だが知ってる？

その鳴き声から、というのが有力である。鳴き声を擬声語化した「カラ」に、鳥を表す接尾語の「～す」がついたものというわけである。枕草子の「にくきもの」の段には、

「鳥のあつまりて飛びちがひさめき鳴きたる」

とあるし、「あさましきもの」の段には、

「かならず来なむと思ふ人を、夜一夜起き明かし待ちて、暁がたに、いささかうち忘れて、寝入りにけるに、鳥のいと近く、かかと鳴くに、うち見あげたれば、昼になりける、いみじうあさまし。」

とあるから、昔から鳴き声が話題になっていたことが分かる。「かか」という擬声語もなかなか面白い。ちなみに、狂言の台本には、「コカコカ」などといった形でも出てくるそう。

鳥を表す接尾語の「～す」というのは、他に「うぐいす」「きぎす」「ほととぎす」などがあるが、どれも「鳴き声+す」が語源ではないかと言われている。ウグイスは「ホーホケキョ」だから、「ウグイ」というのは今一つピンと来ないが、鳥は異性を誘ったり縄張りを主張したりするためために高く鳴く場合と、日常的につぶやくように？鳴く地声というのがあるそうだから、そちらなのかも知れない。キギスは雉子(きじ)のことで、鳴き声は「キキン」とか「キンキン」「ケンケン」などと擬声語化されていた。ホトトギスは、万葉集に「名告り鳴くなる保登等芸須」とあり、「ホトトギと名告りながら鳴いているようだ」と出てくるわけだから、そう聞きなされていたことが分かる。

鳥に関する知識をひけらかしてみたわけだが、それというのも、昨日、友だちに誘われて、立川にある昭和記念公園で行われた野鳥の観察会に出かけてきたからである。観察会といっても大袈裟なものではなく、その友人の高校時代の同級生(環境省を退職し、今は大学の講師などをしている)が野鳥の専門家ということで、その方を囲んで園内を散策しながら野鳥の姿を楽しむという気楽な会であった。とはいっても、午前中約3.5時間で20000歩近く歩いたから、それなりにハードな(バードな・笑)観察会ではあったが。

野鳥は、鳴き声に耳を澄ませて、その声を頼りに姿を見つけることになる。だから、先ずは鳴き声を聞き分けられるようにならないといけならしいのだが、これが結構大変で、「鳴き声がしましたよ」と言われた時にはすでに聞き逃しているわけだし(笑)、それに伴って擬声語も交えて聞き分け方を教えて下さるのだが、擬声語というのはなかなか覚えられないものである。やれやれ…。

歩きながら聞いたその先生のお話で面白かったのは、「鳥は3つのことしか考えていないんです」というもの。さて、何だか分かる？

私は二つはすぐに分かったが三つ目が難しかった。一つ目は当然のことながら「食べる事」である。もう一つは、NHKの「ダーウィンが来た！」でもほぼ毎回テーマになる「いかに子孫を残すか」である。さて、最後の一つは？ 答えは「食べる事」の反対で、「いかに食べられないか」なのだそう。言われてみると「なるほど」である。自然の中で生き抜くのは、厳しいことなのだろう。